

学校関係者評価

受審月日 令和8年6月4日（木）

評価者 *田端 正己（松阪中央総合病院院長） 濱口 早弓（松阪中央総合病院看護部長）
 加藤 憲治（松阪中央総合病院副院長）
 池田 智明（済生会松阪総合病院院長） 松井 美貴（済生会松阪総合病院看護部長）
 廣 純一郎（済生会松阪市民病院副院長） 横山 孝子（済生会松阪市民病院看護部長）
 富本 秀和（済生会明和病院院長） 越川 由美子（済生会明和病院看護部長）
 齋藤 真一（松阪厚生病院院長代理） 田米 郁子（松阪厚生病院看護部長）
 奥見 浩代（松阪厚生病院副看護部長）
 佐原 克学（南勢病院副院長） 高橋 勇子（南勢病院看護部長）
 一志 麻奈斗（同窓会「松看会」会長）
 三井 美輪（在校生保護者代表）
 平野 千里（松阪市障がい福祉課 保健師）
 志賀 かなえ（独立行政法人国立病院機構 三重中央医療センター附属三重中央看護学校前副学校長）
 *委員長

令和7年度

松阪看護専門学校 学校関係者評価

評価項目	評価内容
I. 教育理念・教育目的・教育目標	「地域住民の健康と安全を守るために、人を大切にする心と考える力のある看護実践者を育成する」という教育理念は、地域に密着した看護専門学校として妥当であり、教育目標では「あらゆる発達段階・健康レベル」にある人々に対する基礎的看護実践能力の修得、さらに保健・医療・福祉チームの中で、看護師としての役割を認識して、協働・連携・調整できる能力を身につけると明文化されており、社会や地域のニーズに応じた看護師育成の方向性が明確に示されている。いずれもホームページやシラバスで確認ができ、外部からもわかりやすい。
II. 教育課程	教育課程は、体系的・段階的に整備され、地域社会や現代の看護実践に求められる能力育成を踏まえた内容となっている。特に、「地域と暮らし」などは、松阪市の歴史や文化を学ぶ街歩きの授業も組み入れられ、1年次の前期からこのような教育を行うことは、学生の地域への愛着心や問題意識の向上につながり評価できる。旧カリキュラムからの移行、DX化への対応などの課題も、授業評価や学生の卒業前のカリキュラム評価などをフィードバックされて適切に対応されている。また、臨床実習では、地域の基幹病院や医療介護施設と連携し、急性期から在宅医療まで幅広い看護実践を学ぶ機会が確保されている。教員と実習指導者と密に連携を図ることで、実習指導者も実習の目標を確認し、学生の成長の段階に応じた指導ができ、指導体制が強化されているものと思われる。今後も継続し、さらなる教育課程の充実に取り組んでいただきたい。
III. 教授・学習・評価過程	時代の流れに沿ったDX化が進められており、タブレット端末を使用した講義方法を取り入れ運用を開始されている。令和7年度は高等学校の学習指導要領改訂後の入学生であり、高等学校での学び方が継続できるため、今後学生の強みを活かした学習となっていくと思われる。学習に集中できない一部の学生の学び方に問題が生じたりしてはいるものの、今後も方策を検討され成果が上げられるように頑張ってもらいたい。学生が主体的に学べるようなジグソー学習やシミュレーション教育、事例検討なども取り入れられている。また、多職種との連携を学ぶ科目として、リハビリテーションの学校との協働学習は、それぞれの役割を理解する貴重な機会となり、チーム医療や保健・医療・福祉の連携や看護師の役割を認識できると考える。 終講試験の過去問の流出については、各講師が問題の出し方を毎年変更するなどの対応が必要と思われる。 全国模擬試験における1位という成績や看護師国家試験の100%合格の成果は、松阪看護のレベルの高さの評価ができ、今後も継続できることを期待する。

IV. 経営・管理過程	学校運営は適切に行われており、教育環境・安全管理・個人情報保護などの管理体制も整備されている。地域の医療機関との連携により、臨床実習や教育支援体制も円滑に機能している。また、教職員の連携体制も良好である。 学生確保において、入学者を確保できていることは財源基盤の安定にもつながるため評価できる。また、補助金の交付や加算などから運営体制も整っていると思われる。学生の確保としては、インスタグラムのフォロワー数が着実に増加し、学校からの情報発信がタイムリーな魅力あるものとなり、地域に密着した看護学校の姿をアピールする機会となっている。今後も学生が生き生きとして楽しい雰囲気が発信できるように継続してほしい。インスタグラム以外の方法も検討されるとよい。 医師会も財源状況は苦しく、その中でも、教員の増員を図って、さらなる充実を図っていただきたい。
V. 入学	毎年、指定校推薦枠の見直しや、社会人入試への取り組みもなされ、オープンキャンパスも2回に分けて取り組まれており受験者数の確保に繋がったと考える。令和8年度の定員数は確保できたが、今後更に少子化が進むことは明らかであり、出願者も年々減少傾向にある。社会人の受験生確保の動きとして、社会人向けのオープンキャンパスの回数を増やし、個人向けの遠隔による相談会の実施や、ハローワークや市役所などへの広報や中学生への参加も令和8年度から試みられるなどの対策もされる予定にある。加えて、高校の教員との情報交換や教員による出前授業、県内外への学校紹介などのさらなる強化を期待する。
VI. 卒業・就業・進学	新カリキュラムにおいて、新科目や授業内容を工夫したことにより、教育理念にあげている内容が身についた学生が増加している。卒業後調査では、地域への貢献度を調査され、教育内容へフィードバックされ、人材育成に取り組まれていることは評価すべき内容である。今後はさらに継続され、「社会人基礎力」「臨床判断能力」「看護実践能力」が、臨床における卒後教育との情報交換により、基礎看護教育で伸ばしていけるかが課題である。同窓会とのつながりが強いのが松阪看護の強みであるが、令和7年度は卒業生に授業に参加をしていただく取り組みをしている。教員以外の方の参加はリアリティが増し、学生の学習効果が高まるだけでなく、学生にとって現役の看護職と触れる機会となり、卒業生と学生と双方に良い相乗効果がある素敵な取り組みである。更には、卒業後にも卒業生が来校しやすいホームカミングデーなどを計画された取り組みなども期待したい。
VII. 地域社会・国際交流	松阪マラソンや消防団への参加などのボランティア活動、授業において「地域住民への健康に関する啓発活動（健康フェスティバル）や障害のある方とその家族との交流（ふれあい体育祭）、松阪市内の中学校への出前授業、難病サマースクールへの参加など地域社会での活動、貢献を積極的に行っており、地域に根付いた学校として非常に評価が高いといえる。初めて過疎地域での実習も実施され、地域特性に応じた看護や地域課題への理解を深める学びにつながっている。国際化が進む中で、外国人患者への看護ができるような科目も設定されていて、国際的な視野を広げる教育的な取り組みを今後も続けて頂きたい。
VIII. 研究	松阪地区医師会の倫理審査委員会からの研究に関する倫理規定が整備された。研究活動の礎となることから、研究をする環境整備に努めていることが評価できる。病院との連携・共同研究も視野に入れてはどうか。基礎看護教育に関する学会発表につなげられるように、教員同士が研究活動を支援しあえる体制づくりや、研究に取り組みやすい環境整備が期待される。
総評	地域の看護専門学校として適切に機能しており、時代に即した取り組みが評価できる。また、入学生の確保や国家試験の合格率100%など、学生への学習支援に教職員が一丸となった取り組みがうかがえる。少子化が急加速する中、学校と病院などの地域が連携して学生の確保に努めていくなど、今後更に工夫が必要となってくる。教員の負担軽減や活用方法にも視点をおきながら教育の質を高めてほしい。